

令和3年度
アーティスト・イン・スクール
活動報告書

ARTIST **in** SCHOOL



中島佑太 **in**

前橋市立宮城小学校



反町恭一郎 **in**

群馬県立前橋清陵高等学校

アーティスト・イン・スクール (AIS)とは…

アーティストやクリエイターが市内の小・中・高等学校へ出張し、児童・生徒、学校の先生たちとかかわりながらワークショップや授業を行う学校連携事業です。地域や文化の未来を担う児童・生徒たちとアーティストが共同で学び、自分の可能性を考え、発信する表現力や他者とのコミュニケーション力を身につけます。実施にあたっては、アーティスト、時期、内容等について学校の先生たちと一緒にプログラムを組み立てます。実施6年目となる令和3年度は、長期プログラムと1日完結プログラムを計2校で行いました。

「ふだん」を変える。
ちがう時間が、
ふだんとは
アーティストがいる学校。

目隠しをして絵を描くワークショップでは、ふだんの図工の授業では使わない「触覚」や「聴覚」を使うことによって、いつもとは違うアプローチで作品制作を行いました。また教室に子どもたち全員で「壁」を作るプロジェクトでは、共同でモノを作る楽しさだけでなく、「壁」によって隔てられることで、さまざまな人間関係が生じることを学びました。「教師が生徒に教える」という関係ではなく、アーティストが子どもたちとともに作り、考えるなかで、あらかじめ決まったものではないゴールをいかに形にしていけるかをみんなで共有しました。学校の授業とは異なる体験をすることで、子どもたちが、物事に臨機応変に対応できる柔軟な考え方を学ぶ機会となりました。



中島佑太 in 前橋市立宮城小学校

アーティストプロフィール

【なかじま・ゆうた】1985年、群馬県前橋市生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現学科卒業。大学在学中に地域と関わるアートプロジェクトに触れて以来、社会や他者との関わりの中で個々の表現をするワークショップを独学で探求する。身の回りにあるルールやタブー、人々が持っている“当たり前”を、日常とは異なる視点から問い直し、遊びや旅を通じてその書き換えを試みている。

プログラム概要

期間	2021年9月28日～12月21日
場所	前橋市立宮城小学校 6年生各教室／図工室ほか
対象	前橋市立宮城小学校 6年1組／2組

全体スケジュール

8月4日	校長先生、担任の先生への希望聞き取り
9月28日	Zoomでの遠隔授業、子どもたちとの初顔合わせ
10月5日／7日	【アーティストの自己紹介】＋【ワークショップ『目隠しして描いてみよう』】
11月4日／5日	【ワークショップ『あっちがわとこっちがわをつくる』】
11月30日／12月2日	前回の反省と新しい「壁」についての検討会
12月14日／16日／21日	【ワークショップ『隔たる壁からつながる壁へ』】



活動のポイント

ふだんとは違う評価軸で絵画表現を楽しむ

小学校の美術教育では、対象を正確に再現し「ホンモノそっくり」に描くことが正解とされることが多いように思います。目隠しをして絵を描くことで、絵画制作が「視覚」だけでなく多くの可能性に開かれていることが分かります。絵が苦手な子どもも描くこと自体の楽しさを感じることが出来ます。

共同作業について考える

新聞紙で「壁」を作るワークショップでは、共同でのづくりをすることの楽しさや難しさを学びます。グループでの作業を行うことで、相手の意見に耳を傾けながら自分の意見も主張していく、というコミュニケーション能力が育まれ、また作品が完成することで、成功体験がえられます。

ゴールの決まっていないものをゼロから作る

アーティストは、あらかじめあるゴールを提示して答えを教える、という方法を取りません。テーマを設定し、それを達成する方法をクラスみんなで考えます。そのなかで、子どもたちの自由な発想が生まれるだけでなく、それを実現する能力が育れます。

先生の声

初めて打ち合わせをした時に、「アートは最終的な見栄えだけではなく、そこに至るまでのプロセス（過程）も含めて作品であり表現である。」と話してくださいました。そこで私の図工や美術の考え方が変わったのを覚えています。その後、「アート思考」、「当たり前を問い直す」というキーワードの出ている中で、子どもたちが未来に向けて、問いを自ら見つけ、直感的な自分なりの発想を自信をもって表現できる力がつくようにしたい。という願いのもとに今年度の宮城小学校のAISが始まりました。



先生ではない人が学校にいることが楽しい、という児童も。



目隠しをしながらモチーフを触って絵を描きました。



新聞紙で「壁」づくり。協力するのは難しいけれど、出来上がると達成感がある。



新しい「壁」の制作会議。みんなで意見を出し合いました。



児童たちのアイデアから生まれた透明の壁。それぞれのアイデアを自由に表現できます。



煮詰まったときは、アーティストが相談にのります。

子どもたちの声

じつげん不可能なことを可能にできるようにもっと考えをふくらませてみたいと思った。

かべに絵を書いたとき、みんなが全然ちがう事をやっていた本当にみんなそれぞれだなと思った。

今までふういんしていた感情がAISの時間にできて、自分ではどうにもすることができなくなるぐらい楽しかったです。

「自由」にして「無限」の可能性のあるアートを学校の授業でやらせていただきありがとうございます。

アーティストからのコメント

図工や美術という科目は、キレイにつくることで、それが楽しいとずっと思っていたけれど、そういう思い込みや当たり前を自分で壊して自由になったところに、もっと楽しさがあることをアートは教えてくれました。でもそれは楽しさよりも、モヤモヤや想像力では捉えきれない複雑なものの方が多いもので、1人だと不安にもなりますよね。だから私たちは他の誰かと共にいて、たくさんの違いを受け入れていくんだと思います。

1 ワークショップ 「あっちがわとこっちがわをつくる」

日程
11月4日/5日

テーマに従ってクラスの子どもたちを2グループに分け、両方のグループで、お互いの陣地の間に新聞紙とガムテープで壁を制作しました。テーマは「たけのこの里かきのこの山のどっち派か?」(6年1組)、「給食のメニューで好きなのは、からあげかココあげパンか?」(6年2組)。壁が完成したあと、メッセージを書いた紙ヒコーキを飛ばし合いお互いの陣地でやり取りを行いました。グループ内の結束が強まった一方、紙ヒコーキにはグループ間の対立を生むような書き込みがされる場面もありました。



2 前回の反省と あらたな「壁」の構想

日程
11月30日/12月2日

前回の授業から3週間空いての今回。中島佑太から子どもたちに、前回のワークショップを踏まえた課題が出され、今回はこれに対する解答をそれぞれ発表しました。課題は「壁を使って、向こうにいる「まだ遊んだことのない人」と楽しく遊ぶにはどうしたらいいでしょう?」というもの。子どもたちからは「文字の壁」、「風船の壁」、「半透明の壁」、「水の壁」、「重なった壁」などさまざまな壁のアイデアやそれを使った遊び方が提案されました。そして、子どもたちの提案の中から実現可能なものを次回のワークショップで制作することに決めました。



3 隔たる壁からつながる壁へ

日程
12月14日/16日/21日

子どもたちから出された案を参考に、ビニールシートでできた壁を設置しました。子どもたちは、カラーセロファンやマジックやガムテープ、ハサミなどを用いて、思い思いにこの壁に表現していきました。壁の反対側の絵と組み合わせることで完成する絵や、両方の陣地にまたがる輪っか、壁の向こう側の人をなぞった絵など、ビニールシートをうまく利用した装飾も多く見られました。新聞紙で壁を作ったときとはことなり、協力して制作する楽しさを感じる子もいて、人を隔てる壁ですら使い方によっては、コミュニケーションのツールになるという発見がありました。



答えのないものを 共につくる、 試行と錯誤の コミュニケーション。

プログラム概要

期間	2021年11月17日 13:00~14:30(1組目) 2021年12月1日 13:00~14:30(2組目)
場所	群馬県立前橋清陵高等学校 体育館
対象	群馬県立前橋清陵高等学校 1年生30名(1組目) / 1年生32名(2組目)

言葉を聞いて絵を描くワークショップは、普段意識されない「コミュニケーションの複雑さ」や「他者とわかりあうことの難しさ」を教えてください。アーティストと共に様々な表現を試しながら、生徒自身の聞く力と想いを伝える力に向き合う時間を過ごしました。将来、生徒たちの前に立ちふさがる「答えのない問題」を解決するためには、自己理解や他者理解を通じた「未来を切り拓く力」が必要です。自らの可能性を考え、伝えるアートの力を体験し、自由な時代を自分らしく生きる力を育みます。

活動のポイント

「これまでどおり」が通用しない、
変化の時代に生きる学び

めまぐるしく変化する時代においては、解き方や答えを教える教育だけでなく「解き方や答えのないもの」と向き合う練習が必要です。答えのない時代は、一方で自由に未来をつくるチャンスの拓かれた時代でもあります。生徒たちが自分らしく生きられるための気づきをもらえるようなワークを企画しました。

分かり合えなくて、
あたりまえ

同じ学年の間でも、一人一人考えや想いは違う。ワークショップを通じて、コミュニケーションの前提にある他者に目を向けました。違うからこそ、伝え合う。共に進むために、話し合う。答えのない問題に直面した時、皆で納得して進む方法を模索しました。

教えてくれるのは、
自分自身

アーティストは正解を教えてくださいではなく、ただ「問いかけ、話を聞く」だけ。生徒には「何が正しいか(科学の目)」だけでなく、「自分にとって何が正しいか(芸術・哲学の目)」をもつ大切さを伝えます。



反町恭一郎 in 群馬県立前橋清陵高等学校

アーティストプロフィール 【そりま・きょういちろう】1987年生まれ、群馬県高崎市出身。塾講師、群馬県庁職員を経て、参加型のプロセスマネジメントと映像制作を専門とする「ワークアーツ合同会社」を設立。日本各地のNPOや市民活動の立ち上げを支援し、今までに400本以上のワークショップを企画・実施。現代社会の課題に対し、多様なステークホルダーが助けあってクリエイティブに解決する仕組みづくりを目指して活動している。



友達とコミュニケーション、どんな表現を使ってみよう？



聞こえた言葉を絵で表現してみよう！



「いい学校」ってどんな学校だろう。生徒たちの声を聞き、反町さんも絵や文字で表してみます。



学んだこと、感じたこと、自分で考えたことをワークシートへ記入。アウトプットも大切なこと。



ワークを通じて気付いたことは？グループで話し合い、意見を発表する場面もありました。



「絵を見てください！」と授業終わりに声をかける生徒も。

当日までの全体スケジュール

- 7月28日 アーティストと先生との打ち合わせ。絵や言葉で表現するワークショップの方向性について協議。
- 10月1日 アーティストと先生、スタッフによる実施プログラムのシミュレーション。内容を精査し、意見交換。
- 11月上旬 生徒との距離を事前に縮める手段として、アーティストはビデオメッセージを制作し、生徒は各教室で視聴。

当日のタイムスケジュール

- 13:00 生徒が体育館に集合。
- 13:05 アーティストは自己紹介をしながらテーマに合った簡単なクイズを出題。コミュニケーションを円滑にスタートした。
- 13:15 生徒は事前に引いたクイズを開き、4人1組のグループに分かれて座る。身体も動かしウォーミングアップ。
- 13:20 【ワーク1】アーティストの言葉からイメージした絵を描く。
 - 1回目の言葉は「わぁ、お花きれい」
 - 2回目の言葉は「わぁ、いい学校」
 生徒は互いの絵を見せ合い、受け取った言葉の違いを体験。
- 13:45 【ワーク2】生徒はペアになり、片方は目隠し、もう片方が絵柄を見て、言葉のみで絵柄の説明を試みた。
 - 1回目は丸や正方形など図形で構成された絵柄
 - 2回目は正確な名称のない図形を組み合わせた絵柄
 それぞれ役割を交代し、絵柄の描写を行った。
- 14:15 生徒はワークシートに今日の感想を記入。最後にアーティスト、先生からお話。
- 14:30 終了

※2組目もワークの内容を若干変更して実施。「表情をイラストで描く」ワークを追加で行った。

モ ヤモヤして言葉に出せないことが多い私を、否定しないところが嬉しかったです。いろんな人がいていいんだって言われている気がしました。また、同じグループの子は初対面だったけれど話すことができたので、私はコミュニケーションが得意で、誰とでも話せるのかなということにも気づきました。改めて自分を見つめ直せる機会でも、自分のことを大切にしようって思えました。楽しかったです！

よいし しろ
吉井 紫空 さん

少 し視点を変えただけで見えていたものが違って見えたり、新しい発見ができて嬉しかったです。特に、耳で聞いたことをイラストで表現するゲームは、人によってまったく違う絵になってびっくりしました。「私だとならぬけど、あの子はこう感じたんだ」と思いました。それぞれ感じ方が違って、面白かったです。見たものを相手に言葉だけで伝えるゲームは、なかなか伝わらなくて大変でした。その分、上手に伝わるととても嬉しかったです。この活動で、自分と相手との違いをよく感じる事ができました。

はぎり やえ
羽切 八重 さん

アーティストからのコメント

「答えのない問題」に対し、生徒の「わからないけど、やってみよう」という主体的な反応が印象的でした。子どもたちの力を信じて耳を澄ませば、言葉や絵・動き・表情などそれぞれの方法で表現している様子うかがえます。ワークを通じて少しでも表現することが身近になり、「社会をより良くするために、声を上げていいんだ」と感じてくれたら嬉しいです。個性を大切にす校風と、生徒の自主性を尊重する先生方のサポートがあって実現したAIS。こうした「未来に向けた学び」を糧に、次世代のリーダーが成長していくのだと思います。

生徒の声



答えのない 世界を 生き抜くための 思考を培うAIS

宮城小学校のAISを振り返る

郡司: 昨年から引き続き、AISを受け入れてくださった宮城小学校の藤井校長先生に、AISを受け入れた理由を伺いたと思います。

藤井: 最初の目的は、図工教育の充実でした。「図工が苦手な子どもも楽しく取り組めるようになるといいな」という期待を込めて受け入れました。またアーティストが学校に入ることで子どもたちに「本物体験」をさせ、多様な人と関わりながら多様な学びを展開したいという思いもありました。郡司: 2年連続でアーティストの中島佑太さんが学校へ入り、図工の授業や休み時間に子どもたちと触れ合う時間をもちました。実施されてみて得られた気付きや、学校現場に起きた変化はいかがでしたか？

藤井: 当初は図工という授業レベルの取組として考えていましたが、学習活動の充実はもちろん、それ以外にも期待した以上の成果があったプログラムでした。児童から見て先生は「教える・評価する立場の人」ですが、アーティストはそうじゃない。個人として児童に関わっていただいたのが、非常に良かったと感じています。学校の枠組の中にいない人やその人の考え方に触れることで、教室に新たな風が吹きこんだような印象を受けました。

子どもの変容に関して言えば、昨年度実施した「キット教材プロジェクト」※では、児童はアーティストの制作する姿を見たり、対話したりする中で、制作の幅や考え方が変化していきました。「こうあるべき」という固定観念から子どもが自由になり、多様な価値観や考え方、作り方などに触れたことがとても良かったと思います。今年度のプログラムの児童の感想には「実現不可能と思っていたことを可能にできるように、もっと考えを膨らませてみたい」という言葉もありました。きっとこの経験は、今後の人生の中でも、可能性を広げていこうとする意欲に繋がると思います。大げさかもしれませんが、子どもたち一人ひとりの生き方に関わるような学びがあった、答えのない世の中を生き抜くための力を培う時間だったと感じています。

郡司: 先生について、変化はどうでしたか？

藤井: そうですね、AISは子どもたちだけでなく教員にとっても刺激になりました。最初の打合せでアーティストに「プログラムのゴールイメージは何ですか？」と聞いたら、「子どもたちと作りながら考えるので、まだない」と言われたことが衝撃的でした。正解の分からない不安が刺激となって、学校文化の不自由な面をいい意味で壊したというか、教員も授業づくりに対して「こうあるべき」という思いが崩れて柔軟に豊かな発想をするようになりました。決められたルールがない分、自由度が高いので、

【鼎談登壇者プロフィール】

藤井 麻里 (前橋市立宮城小学校)

18年間の小・中学校教員、3年間の教頭職、前橋市教育委員会事務局勤務等を経て、現在、前橋市立宮城小学校校長。



高松 智行 (カマクラ図工室代表・神奈川県公立小学校教員)

子どもたちが未定調和の旅や創作活動を続ける「カマクラ図工室」において、アーティストと共に考え、行動しながら、小学校教員である自身のフツウを拡張中。



郡司 明子 (群馬大学共同教育学部准教授・美術教育)

群馬県生まれ。小学校教員を経て現職。身体性を重視するなかで衣食住に着目し、生活文化を味わい直す「アート」の教育活動を展開。美術教育における「アートの身体」論の構築を目指し実践研究中。



自分達の予想を超える「何か」が生まれたという実感があります。難しさはありますが、今後はこうした本当の意味で「子ども主体」の授業づくりが求められているのかと思います。

高松: お話を聞いていると、宮城小学校のAISはとてうまく機能したのだと感じます。やはり、今の学校現場を閉塞的にしているのは「ゴールがないと不安」な教員だと思います。子どもは本来「ゴールがある」とつまらない「生き物」で、よくわからない未来に対して「何か面白いことはないかな？」と積極的に進んでいきます。例えば「砂場遊び」をしている子どもは、行為と行為を繋ぎながら自分でゴールをつくります。学校教育でいえば、図工の造形遊びや美術鑑賞、音楽の創作、体育の身体表現、総合的な学習の時間があり、子どもたちにとっては本来の姿のまま学べる絶好の機会なのですが、主体的に実践する教員は少ないですし、総合で言えば、どのクラスも教員主導で同じ内容で取り組んでいることが多いです。

郡司: 教員も「ゴールへのイメージ」があって、そこへ到達するように授業づくりをしていますから、想定外のことを排除しがちになるのだと思います。子どもたちを導こうと強く思うからこそ、それ以外の声がノイズとして聞こえてしまう。アーティストに出会う経験は、教員に子どもの声を受け止めるきっかけ、子どものアーティスト性に気付かせる機会になるかもしれません。

藤井: 私はAISを通じて、本来、子どもはアーティストだと感じました。ある児童が感想に「今まで封印していた感情がAISの時間に出てきて、自分ではどうすることもできないくらい楽しかった」と書いていて、学校の中で「感情を封印しなければいけない」と思わせてしまう、子どものアーティスト性を受け入れる眼差しがなかったことを気付かされました。既存の価値観にとらわれないアーティストの姿は、自分が「こうあるべき」という姿を目指しすぎていることを教えてくれます。図工を楽しむ児童は「こうしてもいいんだ、これって楽しいな」という経験によって、さらにアーティスト性を広げ深めてくれたと思います。

アーティストとの出会い

高松: 僕は「ゴールがないと不安」な教員を「ゴールがないから、どうなるのか楽しみ!」というマインドに持っていくところにアーティストや美術館の役割があると考えています。僕が取り組んできた「鎌倉なんかナレー」※や「カマクラ図工室」※といった教育とアートを繋ぐ活動のルーツは、子どもたちとの美術館体験でした。

郡司: 美術館での体験について、もう少し聞かせてください。

高松: 「べき」「ねば」という「答え」で埋め尽くされた学校に対して、美術館は作品という「問い」しかないわけです。学校では清く正しく美しい児童として付度したり、他者の存在を否定したりしていた子どもたちも、美術館で初めて「私」を開き、同じ地平に立って「感じる」ことから出発できたように思います。求められた答えがなく、感じる権利がある美術館では、自然と互いの違いを受け入れながら、対話的な関係性を築くようになりました。アーティストが学校現場に入ることも同じで、彼らは児童や教員の立場を土台から揺さぶりますよね。気付けば本来の「私」の部分が蓋を開けて対話が始まるというところが、学校現場を変化させるきっかけになるのだと思います。

郡司: アーティストは学校の「こうあるべき」という考えに縛られず「それは本当に必要なか?」「そもそもなぜやるのか?」といった問いを投げかけてくれる存在ですね。教員は教育という言葉のもとに、まず指導ありきの構えをとってしまいますが、アーティストは一步引いたところから「もう一度感じてみよう、考えてみよう」という「探究の目」をもたらしてくれる。子どもたちもそれに気付いて、「この人と一緒にいれば、何か新しい世界が開く」とワクワクした気持ちを感じているように思います。

高松: 感じることを出発点にして自分軸を持つと、身のまわりの当たり前に違和感を抱くようになります。違和感は表現する上で非常に大切なものですが、学校では規律という名のもとに排除されてしまうことも多いです。だから僕のクラス経営は、「半学級崩壊」の秩序を大切にします。朝登校してからひたすら創作している子も積極的に放置して、子どもたちの中にある「べき」「ねば」という考えを意図的に壊していきます。そして、一人ひとりの見切り発車的な言動を面白がり繋いでいくと、教室は大概「美術館」のように造形物で溢れかえります。学校のスタンダードに捉われず、大人が子どもを信用してみることで開ける世界もあるんですね。藤井: 「信用」はキーワードですね。これからの教育現場には、子どもたちを信じて任せ、失敗を恐れず子どもたち自身にやらせてみるのが大切だと思います。

郡司: 教育現場が「できる/できない」という二者択一の価値観に縛られているような部分もあるのかもしれない。

高松: 過度に同調圧力が働く学校では、皆と同じように「できる」ことが良いことで、「できない」ことが良くないことという意識が強化されるため、子どもたちの間では日々、自分を自分以上にみせる競争が起きています。アーティストと関わるようになってから、僕は「できる」ことを増やすことよりも、「できない」ことを他者と分かち合ったり、ユーモアに変換したりしながら、面白く生きていく方法を子どもたちと共に模索していくことが必要だと思うようになりました。

郡司: 各々に得意なことで力を発揮し協働する社会構成主義の考え方にも繋がりますね。先ほどキーワードとして出た「信用」、そしてもう少し踏み込んだ言葉に「信頼」がありますが、大人が子どもに信頼を寄せることで、今まで聞こえなかった言葉が聞こえたり、見えてなかった面白さが見えてくるような気がしています。

藤井: そうですね。大人が思う以上に、子どもは色んなことを感じ考えていますから。教員が積極的に子どもの声に耳を傾けると子どもの力に気付く信頼できるようになるかも。ただ、先生方は真面目で幼い頃から優等生という人が多いから、間違ったり失敗したりすることには不安を感じてしまうのかもしれない。

高松: もちろん僕もアーティストと関わると、自分は「優等生」と感じる人が多いので、現場を感じる不安感も分かります。様々な価値観に触れて、自分のマインドを根本から揺らす場が必要不可欠だと思います。

郡司: 自分が接している世界が全てじゃない、学校文化以外の価値観もあると、大人も子どもも知ることは大事ですね。高松さんが優等生の自分、そして自分とは異なるアーティストの存在に注目し始めたのはいつ頃だったんですか？

高松: 僕が最初に会ったアーティストは、小学校の同級生。僕は先生の期待に応えることができるタイプでしたが、彼は意図的に自転車登校するなど、学校の当たり前に一石を投じるような子でした。優等生の僕からすると、なぜ彼が先生から叱られる言動を繰り返すのか理解不能でした。小学校5〜6年生の時、彼を含めた友人たちと共によく旅行をしていました。旅先では釣りをすることが多かったのですが、一度最終バスに乗り遅れてしまったことありました。計画が崩れた僕はパニックになったのですが、彼はむしろその状況を楽しんで、「こういう時は、歌を歌いながら駅まで歩こう!」と言い、半裸で歌い出しました。恐らく3時間以上は歩いたと思うのですが、駅に到着した時にはとても清々しい気持ちになっていました。この時に気付いたことは「学校の100点満点の世界で計り知れない出来事に遭遇した時、頼れるのは彼のような人間なんだ」ということでした。変わり者を面白がることで新しい世界が拓けるという実感を得た僕は、学校生活でも彼とタッグを組んで、一つ一つ楽しみをつかっていきました。そんな僕は今、教員になって変わり者のアーティストと共に活動しているわけですが、やっていることは当時と同じです。

郡司: この旅のお話は、優等生気質が求められる学校現場と、クリエイティブなことを考え生み出すアーティストが協働する可能性を示しているように思います。児童にとっても新たな世界を拓くことに繋がりがそうだし、教員も自らの個性と向き合いながら教育現場をつくることができそうです。

高松: 冒頭の話にも繋がりますが、教員による教員のための研修や会議は、結局、子どもたちを評価するモノサシの目盛りを細かくしているだけのようなところがあります。だから、子ども一人ひとりの小さな違いが、どうしても指導の対象として気になってしまう。今後は目盛りの数ではなくて、モノサシの種類を増やししながら、教員としてのセーフティゾーンを広げるような体験が必要だと感じます。

「個人」の在り方

郡司: そもそもアーティストはどんな存在なのでしょう。彼らと学校は、どのように協力していけるのでしょうか。

藤井: 高松先生のお話を聞いて、学校の中で個性の違う人たちが互いの良さを伸ばし合うような取組をすることが、まさに理想形なのかなと感じました。学校では社会規範や規律を教える必要もあるし、一方でアーティストのような自由な発想や多様な考え方ができるように育むことも必要です。そこをバランスよく共存させていくことが、今必要ではないかと思っています。

高松: 僕は前任校のアンケートに6年生が書いた「研究授業よりも先生と本音で話せる5分がほしい」という思いに向き合うことがスタートだと思っています。「児童」として振る舞うことに疲れていたこの子は、「私」を開いて新しい世界を見てみたいと訴えたのではないのでしょうか。「鎌倉なんかナレー」に漫画家の山田玲司さんと呼んだことがありますが、山田さんは国語教材の「スイミー」を、皆で力を合わせて困難を乗り越える話でなく、「変わり者のメリットの話」と解説されていました。一匹だけ黒い魚という変わり者のアイデアや発想を周りが面白がることで、赤い魚たちに新しい世界が拓けたという視点を伝えることが大事だとおっしゃられています。

郡司: なるほど、今回の宮城小学校では中島さんが「スイミー」になった

前橋市立宮城小学校 教諭 内村 裕伸 *Hironobu Uchimura*

アイマスクをして渡された物の絵を描く活動では、子供たちはドキドキ、ワクワクしながら、楽しそうに活動していました。今まで当たり前に行っていたのに、「絵の具ってこんな手触りだったんだ」「見るってすごい」と様々な考えを持つことができました。そして、上手な絵ではなくても自分にしか描けないオリジナルの絵を楽しむことができました。

新聞紙で部屋に壁を作り、メッセージを送りあう活動では、活動自体を楽しみながらも「なぜ争いが起きるの?」「個性が違うから争いが起きる?」「考え方が違うから争いが起きる?」「個性と考え方は違うの?」と様々な問いに対する考えを自分なりに考えることもできました。

最後のAISでは「透明な壁にしたら?」という子どもたちの発想のもと、分断をする壁で遊んでしまおう、という活動をしました。世界には大きな壁、見えない壁、いろいろな壁が存在しますが、それらに対する問いや解決方法を小さな教室で、大きなスケールの問題を考えることができたような気がします。

AISに関わる方々は子どもたちの活動を見守ってくださり、子どもたちの自由な発想を「おもしろい!」「楽しそう!」という短い声かけや、何も言わずに笑顔でカメラを向けることで「いい表現しているねー!」と示してくれました。おかげで子どもたちは自然と自分の発想や考えに自信を持ち、それを広げたり深めたりすることができました。

中島さんをはじめ、アーツ前橋の方と活動できたことは、子どもたちにとっても自分にとっても、貴重な経験となりました。ありがとうございました。また、一緒に活動したいです。

群馬県立前橋清陵高等学校 人権・道徳教育主任 新井 悠子 *Yuko Arai*

AISというと、小中学生がアーティストの方と作品をつくったり、体を動かしたりするイメージがあり、高校生ではどんなことをするのだろうと初めは期待半分不安半分でした。

反町さんには、答えのない問いへの向き合い方を、ペアワークやグループワークを通して教えていただきました。新学習指導要領にもあるように、自ら課題を見つけ、主体的に探究して解決しようとする力は、私たち教員が日々の学校生活や授業を通して生徒に身につけてほしいと考える力です。言葉にすると堅苦しいことを、反町さんはあたたかな雰囲気の中、わかりやすい題材で生徒と共に考えてくださいました。なにより、生徒が前向きに取り組み、終わった後にいい表情をしていたことが印象的で、「やってよかった」と思いました。

反町さんやアーツ前橋のみなさんには、事前に本校で生徒実態を見ていただき、この活動を通して生徒がどのような気付きを得て成長してほしいかという教員の思いも忌憚なく伝えさせていただきました。たくさんの方の要望に對して、ひとつひとつ丁寧に応えていただき、有意義な時間を持てたことに感謝しています。このような機会を与えていただき、ありがとうございました。

地域を巻き込むAIS

郡司: AISの活動を継続するためには、やはり地域を巻き込んだ取組にしていくことが重要になると思います。子ども、保護者、地域と一緒にあって、新しい授業づくりや学校づくりが進んでほしいと思います。

高松: 教員が「私」を開くことができれば学校は元気になるという思いで、これまで多くのアーティストを学校に招いてきました。4年間継続した「鎌倉なんとかナーレ」では、アーティストと積極的にコミュニケーションを図り、新しい教育活動を展開した教員もいましたが、本来の仕事と並行して取り組んでいたため、実際は現場にかなりの負担を強いてしまいました。そこで僕は、初めて教育のあらゆる責任を学校で丸抱えしようとしている自分に気づき、アーツ前橋でも活動しているアーティストの滝沢達史さんと共に学校の「外」に出て、子どもたちと旅や創作をする「カマクラ図工室」を立ち上げました。

藤井: コミュニティスクールという取組に注目しています。コミュニティセンターや児童クラブなどが一体化して一つの学校となる複合施設は、アーティストを派遣しなくとも施設の中に児童とアーティストが交流できる場所をつくることができますよね。外部から来てもらうのもいいのですが、いつも一緒にいて何となく影響し合うということが理想かな。

郡司: イギリスで行われているアーティストティーチャーの取組も参考になりそうです。アーティストが学校で制作活動を行うことで、子どもたちはその仕事ぶりを自然と目にすることができるというものです。

高松: 今は人の数だけ生きるカタチがあり、多様な価値観を持つ親の元で育った子どもたちが学校へ通ってきますから、教員一人の許容量の中で全ての子の個性を伸ばすことは難しいでしょう。これからの学校は「町医者」としての機能を充実させ、子どもの個性に見合った社会教育機関を積極的に紹介していくべきだと考えています。それが、社会全体で子どもを育てることにつながります。

郡司: 子どもたちの居場所が地域のコミュニティとして活性化すれば、教育のあり方が拡張しますね。本日の鼎談では「関係性のきっかけをつくる」ことが美術館の役割としてあると感じた次第です。アーティストや美術館が、地域や学校へ関わっていくことで、可能性が広がることは多々ありそうです。

藤井: 児童が自由に個性を伸ばし、教員も個人として生き生きと働ける教育現場をつくるには、地域の中で関わりやすい環境を整えていくことが重要ですね。AISは児童・教員共に、生き方そのものを変えてしまうようなインパクトを生み出す経験でした。各学校で実践・継続してほしいプログラムだと思います。

郡司: 「管理職も枠をはみ出す勇気がある」と藤井先生はAISを振り返られました。今ある枠を疑い、再構築していくことは社会全体にとって必要なことです。AISを「地域と一緒にあって新たな枠組みを創り出すチャンス」として活用してほしいと思います。これからどのように教育現場へアーティストの眼差しを取り入れていくか、AISプログラムを続けていく中で、地域のみなさんと未来を考えてみたいですね。

※本記事は、2022年2月23日にオンラインで開催された鼎談を元に編集をしています。
※本記事の赤字は、以下のQRコードから詳細をご覧ください。

キョット教材プロジェクト



鎌倉なんとかナーレ



カマクラ図工室



ということですね。

高松: 学校の「べき」「ねば」を抛り所に仕事している教員が、「私」の中の違和感を出発点にして表現しているアーティストと関わることで、教員の中に眠る「私」の部分がぐすぐぐられるのではないかと思います。教員の個性や教育実践はバラバラであってほしいですし、小学校6年間で多様な個性を発揮する教員と出会うことが、6か国を旅することと同じような経験として、子どもたちの自立に向かう糧になってほしいと思います。

郡司: 核になるのはいかに教育現場の中で「私」になれるかですね、教員も児童も。アーティストの存在は「個人」としてあろうとする人の背中を押してくれる力になるかもしれません。一方で藤井先生に伺いたいののは、個性を出す教員が増えると管理職としては大変な部分もあるのではないかとということなのですが……。

藤井: 校長という立場の私自身、様々な枠組みの中でセーブしていることもあります。学校も変わる必要性を感じて、管理職も枠をはみ出す勇氣を持たなければならないと、今回のAISで実感しました。

郡司: AISもそうですが、枠そのものを創り出すことはやりがいがある一方で難しさもあり、先生方も苦勞されていると思います。高松先生は、その辺りをどのように工夫されているのでしょうか。

高松: 例えば、僕の図工の授業では、提供する材料は必要最小限にしています。今の子どもたちは、平日は学校生活に加えて塾や習い事があり、週末は娯楽で予定が詰まっていますから、退屈になることがあります。だからこそ、「物足りなさ」や「つまらなさ」から出発して、どうしたら面白くなるかを考えて行動する時間が大切だと考えています。それが図工であり、生きるということ。アイデアがなければ校庭を散歩するのもよし、たまたま拾ったものを作品づくりに活かすことで新たな世界が拓けるかもしれない。楽しみは与えられるのではなく、つくるものであるということ伝えていきたいと思っています。

藤井: 図工の評価は、どのようにしていますか? 「ゴールがない」ことを不安に思う教員の根本には、単元や授業全体を見通して先に評価規準(基準)を決めなければいけないという思いが枷になっている気がしています。

高松: 評価基準については、オリエンテーションの時、子どもたちに「図工の考え方」を話しています。例えば、真っ白な雪の世界の中で、教員を先頭に子どもたちが隊列を組んで歩いているとします。そんな状況で子どもたちが「一番やりたいこと」って何でしょうか。おそらく「隊列からはみ出して、雪の上に自分だけの足跡を付けること」ですね。僕は、それが図工であると説明しています。まずは一歩、みんなと一緒にの世界からはみ出してみることが重要です。そして、自分の足跡を伸ばせるだけ伸ばして、突き抜けた分だけ評価すると伝えています。もちろん途中で飽きたり、行き詰まったりするかもしれない。そうしたらまた違う素材や他の人の技法を参考に、もう一度自分の道を伸ばしていく。最後は、制作過程を記録した画像を見返しながら、現状を「はみ出した、変化させた」ところと「足跡を伸ばした、追求できた」部分の重ね方と距離を評価しています。

郡司: 隊列からはみ出すことが推奨されるのは図工・美術の醍醐味ですね。個が際立つことを応援しながら、全体の中で学ぶ関係性も大事にされている。最終的に、主体的で対話的で深い学びになっていく仕組みが見えてきました。

高松: 素材とじっくり向き合ったり、アイデアがなくて心が乾いたりする時間や失敗できる場を保証することを意識してやっています。その子ならではのクセを評価するような授業なので、みんなと同じように「できる/できない」という違いも気にならない。奇抜なことをしなくても、自分の道を進んでくれればと思っています。

先生方へ For School Teacher

【アーティスト・イン・スクール実施の流れ】

1

派遣アーティスト決定

これまでに展覧会に参加したことのあるアーティストなどから、アーツ前橋が派遣アーティストを検討します。実施を希望する学校や、前橋市教育委員会と相談のうえ、決定した学校に対し、実施時期や内容を踏まえて派遣アーティストを決定します。

2

打ち合わせ・下見

コーディネーター、アーティスト、アーツ前橋スタッフが学校を訪問し、児童・生徒の皆さんのふだんの様子や先生のご希望をうかがい、プログラムの詳細について打ち合わせします。また、会場となる場所の下見を行います。児童・生徒の皆さんの肖像権についても、予め確認させていただきます。

3

アーティスト・イン・スクールの実施

スタッフやコーディネーター、教育を学ぶ大学生などがサポートで入ります。今後のAIS 事業に反映するため、終了後に児童・生徒の皆さんや先生方へアンケートの実施をお願いする場合があります。

4

報告書・記録写真・映像の確認

年度末までに報告書や記録映像などを作成します。学校へ内容を確認させていただいた上で、アーツ前橋の公式サイトで公開します。

*原則として、前橋市内に所在している学校で実施します。 *学校側の費用負担はありませんが、学校にある機材や道具をお借りすることがあります。

これまでに実施してきたプログラム
についての詳細はアーツ前橋公式
サイトに掲載しています。ぜひご覧
ください。



主催 : アートによる対話を考える実行委員会 / アーツ前橋
助成 : 令和3年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業
写真 : 木暮伸也(P.1-4, 表紙左) / 市根直規(P.5-6, 表紙右)
ライター : 西涼子(P.5-9)
デザイン : 善養寺良子
動画撮影編集 : 岡安賢一
アーツ前橋 : 井上康彦 / 大井田弘子 / 今井朋